

第3回人文・社会科学系研究推進フォーラム

2017年3月3日（金）13:30-18:00

国立大学法人 琉球大学 研究者交流施設・50周年記念館

主催：琉球大学研究推進機構研究企画室、共催：京都大学学術研究支援室、筑波大学 URA 研究戦略推進室／ICR、大阪大学経営企画オフィス URA プロジェクト、早稲田大学研究戦略センター

事例紹介

古典学分野の国際連携と技術イノベーション

筑波大学
人文社会系
志田 泰盛

ただ今、紹介にあずかりました筑波大学の志田と申します。このようなタイトルで発表させていただきます。いつも大変お世話になっている筑波大学 URA の森本さんから今回の登壇を依頼いただいた際に、普段おこなっている海外との共同研究の事例紹介などでよいとのことでしたので、あまり背伸びせずにお話ししたいと思います。

古典学の分野のお話になりますので、もし今回お集まりの皆さんが「地域課題の解決のための提言」あるいは「人文学の新たな価値の創造に関するヒント」などを期待されているとしたら、お持ち帰りいただけるような話題を提供できるかどうかあまり自信がありませんけれども、どうか箸休めと思って聞いていただければと思います。

簡単に私の経歴を紹介させていただきます。私の専門はインドの古典です。学部生の最初の2年間ぐらいは理系でしたが、その後、文転しまして修士に3年間、博士に5年半かけて、その間にインドにプチ留学したり、学会の事務を切り盛りしたりしておりました。その後、京都に拠点が移りまして、学振特別研究員のPDと、京都大学白眉センターという、研究に専従できる夢のような生活をさせていただきました。そこで、合わせて8年ぐらい浮世離れの研究生活をさせていただきました。去年からまた俗世に戻ってきまして、今、リハビリをしております。筑波大学では、「海外教育研究ユニット招致プログラム」のプログラムマネージャーをしておりますので、その紹介がメインになるかと思えます。国際連携と技術イノベーションということで話題提供させていただきます。

国際連携が拓くインド古典学の展開

長い名前ですので、「海外ユニット招致」と普段略しておりますが、これは筑波大学の建学以来の理念であります「トランスボーダー大学」を目指す一連のプロジェクトの中の一つに位置付けられます。「大学のあらゆるシーンでのトランスボーダー化」は、約40年前に創立されたときから大学の第一の理念として掲げられおり、最近では「キャンパス・イン・

キャンパス」とよばれる形での実現を目指しているようです。これはダブル・ディグリーとかジョイント・ディグリーと呼ばれるタイプの大学間の連携プロジェクトでして、単位互換とか交換留学などに比べてはるかに大きな規模での長期的な連携ですが、いきなりそこまでは話は進みませんので、もう少し小さい規模、例えば部局単位とか、あるいはより少し小さい研究室単位で研究交流を活発にしようというプログラムも並行していて、その一つが「海外ユニット招致」に相当するのだと私は理解しています。つまり、キャンパス・イン・キャンパスという大きな木を育てるための、もう少し小さな規模のものが「海外ユニット招致」とお考えいただければよいかと思います。

昨年度、2015年度からスーパーグローバル大学創成支援と呼ばれる文部科学省のプロジェクトに幾つかの大学が採択されています。そのための予備的な実績づくりという狙いもあったのだと推察されますが、それに先立ちまして、2014年度から本学の中で人文社会系と医学系において、この「海外ユニット招致」が立ち上げられました。そして、人文社会系の中からは、私たち、インドやチベットの古典学を専門とする教員グループがハンブルク大学のインド学チベット学研究室と連携を進めております。

ハンブルク大学のインド学チベット学研究室には主に3人の教授、Principal Investigator (PI) がいらっしゃいまして、3人とも世界的にとっても有名な研究者です。この3人だけでインドやチベットの古典から、ブータン、ネパール、そしてヨーロッパの現代仏教までカバーできるほど研究領域の守備範囲が広く、それぞれ個性豊かで、年齢的にも40代後半から50代で、非常に高いレベルでバランスの取れた研究室です。日本だけではなく、ヨーロッパでも今、人文学が少しずつダウンサイズしているようで、イタリアなどでも国外に少しずつ研究者が流出しているようですが、このハンブルク大学のインド学・チベット学研究室には、世界から才能ある学生が集まり、そしてそこを巣立った研究者が世界のアカデミック・ポストを獲得してしまっていて、とにかく今とても勢いのある研究室です。そして、私のボスである筑波大学のスタッフ陣が、ハンブルク大学の先生がたと交流があったこともあり、筑波との連携にうなずいていただいたという経緯がございます。

システムとしましては、この3人の先生に筑波大学の教授としても兼任していただいて、年間で最大10週間分の給与を筑波大学に保証いただくという形になっております。現在、筑波大学の各部局で6つの「海外ユニット招致」が動いていて、その中間報告会が再来週にあります。予定された5年間の期間終了後このプロジェクトがどうなるか分かりませんが、将来的には先ほど申し上げた、より包括的な国際連携に進むか、あるいは、大学からの補助なしで外部資金を取ってきて、世界と戦える研究室として自走できるようにするか、といういずれかの方向を目指していくのではないかと推察します。そして、再来週の中間報告会用のスライドも適宜引用しておりますので、この先のスライドに英語が入っておりますが、先ほどの西田先生の基調講演にも「英語の重要性」のお話がありましたので、どうかご勘弁ください。

われわれの分野は、インドとチベットの伝統的知識とそれに基づく文化的活動全般が主

な研究対象となります。地域的にはインドの古典思想が広がった、西アジアを除き中央アジアを含めたアジア全域といえます。ただし、研究資料としての文献証拠を古い写本に限る研究が大半です。方法論としてはいくつかありますが、まずは、文献学的(Philological)といわれるアプローチが主流です。例えば、このスライドは私が使っている写本ですが、ご覧のように虫に食われたり、右側が壊れてしまったり、あるいは、同じ言語でも様々な文字で書かれていることもあるわけですが、こういった資料が主な対象になります。このような現存の写本が作成・保存されるまでに、おそらく何十回とコピーされていることも予想され、いろいろなノイズが蓄積されていますので、可能な限りノイズを取り除き、伝承のプロセスを遡って、少しでも正確にオリジナルの文言を推定しようという「批判校訂」が大きな仕事になります。そして、校訂した文献を現代語に翻訳するというのも重要な仕事です。このスライドは筑波大学人文社会系の吉水千鶴子先生が校訂したチベット語の文献ですが、こういった校訂テキストを、主に英語や日本語の現代語に翻訳しています。そういった翻訳研究を資料として、別の研究者が比較思想研究などをするための礎になるような、そういった意味でのいわゆる基礎研究が文献学的なアプローチになります。

また、歴史的なアプローチというのもあります。そもそもどうやって文献資料や、あるいは思想が伝承したかというのは、不確実性の塊みたいなものなんですけども、じっくり読んでいくと少しずつ分かることもある。そして、インドには無数の宗教哲学が群雄割拠していましたが、それぞれの宗教哲学が相互にどの程度寛容だったのか。お互いの教義をどの程度正確に理解していたのか。あるいは、自らの教義体系に対してどの程度クリティカルだったか、あるいは逆に妄信的だったのか。実際にどれくらい共存と淘汰が起こったのかというのを、当時の思想家の著作活動の背景知識にまで踏み込んで、決して現代のわれわれの枠組みを押し付けることなく再構築しようとする態度といえるかと思います。

思想的ないし哲学的アプローチもあります。インドやチベットの古典学が、現代のわれわれが生きていく上での知恵を提供しうるかということ、確かに仏教は創立当初から「生老病死」を問題視していたわけですし、あるいはバラモン教やヒンドゥー教には、俗世的なことも含めて処世術とか帝王学とか老後の過ごし方とか性の悩みとか、いろいろ語っているジャンルもあります。ただし、断片的で多様な現代社会のニーズにどのように応えるべきか、という臨床的なアウトリーチの方法論につきましては戦略的にしっかり分業をするべきなのではないかな、と私自身は考えております。

それから、人文情報学的な ICT 技術を使ったアプローチもあります。例えば、インド学チベット学の語彙のデータベースを作る国際プロジェクトを進めています。といいますと、どこにでもありそうなものにも聞こえますが、ある特定の古典語が他の古典語にどうやって翻訳されたかとか、あるいは近現代の研究でどのように翻訳されているとか、あるいは、この写本ではこういうふうに記録されているというように、特定の論文の何ページ目、ないし特定の写本の何行目みたいなレベルまでまで跡付けていくという、着実なプロジェクトとして、国際的にも大きな規模のものです。これも今回の国際連携の一つの柱になって

おります。

教育面では、ハンブルク大学からお越しいただいた先生には、筑波大学で授業や研究会をしていただいております、学生にとっては古典語だけでなく英語の教育にもなっております。プロジェクト3年目の今年は、筑波大学の学生を連れてハンブルク大学を訪問しまして、学生にはプチ武者修行をしてもらいました。たまたま今週は大阪大学の有名なヴェーダ学の先生に筑波大学に来ていただき集中講義をしていただきましたが、出席した学生にとっては2カ月ぶりの日本語の授業だったということで、授業の内容はとても難しいんですが、少し安心した様子でした。

一方で研究面では、ハンブルクの先生がたはみな知識豊富ですので、国内の研究者と様々なテーマでの共同研究をしていただきました。数えてみたところ、中規模のワークショップをこの3年間で17回ぐらいしました。ちょっと大きめの、一般に開放するようなシンポジウムを8回。それから、日本の各大学に回っていただいたレクチャーを4回。それから、数人の規模の小さな研究会を8回ぐらいしていただきました。このスライドは、今年のシンポジウムのポスターと共同研究の成果としての出版物です。

研究支援への期待

ここから先はもしかするとオフレコなんですけども、私の個人的な意見として、シンポジウムの主催は充実感・達成感がありますし、写真やポスターの見栄えはいいんですけども、専門の近い研究者同士が数人だけ集まったような一見地味な読書研究会の方が、研究成果に直結している印象があります。もちろん、限りのある予算を配分しているわけですから、リサーチグループとして成果の公開は義務的だと思いますが、とはいえ、一見地味に見える研究でも評価する軸があるといいなと思うことがあります。

さて今回は森本さんからお声掛けいただきまして、立場上お断りできないとはいえ、私としては初めての沖縄ということもありまして、喜んで参加させていただいております。先ほど話題提供いただいた先生がたのお話もとても勉強になりますし、おそらく全く後悔はしないと思いますが、その一方で、「たれば論」ですが、この時間に孤独に文献に向かっていたらどれぐらい研究が進んだのだろうか、と心の中では思ってしまうのは本音です。

少し話は変わりますが、事務仕事の煩雑さという問題を実感しております。これは私が8年間浮世離れ的な研究生活をさせていただいたせいかもしれませんが、国際的な共同研究を、特に日本で行う場合の事務手続きが、各大学のローカル・ルールの問題も含めて、とても煩瑣だと感じる場合があります。ほんの一例ですが、日本国内の移動の交通費を所得とみなされる時とそうでない時の基準がわかりにくかったり、そして旅費が所得とみなされると税金を差し引かれて本人の交通費は赤字になるわけですが、その事務的説明を教員に一任されたりなどという問題です。私自身は海外の研究機関での経験はわずかですが、その時と比べた時の事務量が大きく違うような印象がありますので、このあたりがもう少しシンプルでスムーズになると、国際連携をより進めやすいのではないかなと思います。

「パワードスーツ」としての情報学と ICT 技術の活用

最後に、技術イノベーションについて簡単に触れておきたいと思います。われわれの研究分野はよくディシプリン型と分類され、最近「ディシプリン型」というとネガティブな響きしかありませんが、研究分野として近代インド学は 200 年くらいの伝統があり、その歴史の中で方法論も紆余曲折を経て、まあベストと思われるものに落ち着いている感がありますので、さらに新しい方法論を求められても、なかなか思いつきでいいものは出てこないように感じられます。

さて最近、研究機関への補助金も少しずつ減ってきており、もしも各研究者の後任が取れなくなると、今まで蓄積してきたインド学研究全体の質を維持することすら困難ですから、「人文系分野の構造改革」というのは聞き捨てならないのは確かです。しかし、筑波大学人文社会国際比較研究機構（ICR）の機構長もよくおっしゃっていますが、この現状は民間に比べれば「逆境」と呼ぶほどではなく、「向かい風」ぐらいであり、様々な工夫である程度超えられるのではないかとお考えのようです。たしかに、インド学の分野は、各大学の先生により専門分野が棲み分けされ、その多様性と質がなんとか保たれている状況のようにも見えますが、今後の「向かい風」に対しては、各先生の専門領域の守備範囲を広げたり融合したり、あるいは専門家と準専門家が協力して集合知を活用するための ICT 技術を取り入れたり、というように、新たな棲み分けと合理化によってある程度は乗り越えられるかもしれません。

その一方で、何十年か先のことを考えますと、すでに様々な知識人が予見しておりますので専門家ではない私が付け加えられることはありませんが、シンギュラリティ（技術的特異点）と呼ばれる事態が、数十年の単位の間に来るとされ、もしかすると人類全体にとっての脅威ともいわれているようです。計算機の性能は過去 30 年で 100 万倍ぐらい上がったと評価されていて、今後もこのペースで計算機の性能が上がって、さらに計算機が自分自身を改良し始めると、ますます加速度的に性能が上がっていくことが予想されているようです。すでに、将棋や天気予報などの特定の分野で名人的な立場の人が脅かされているようですが、今後多くの分野で計算機にかなわなくなると予想されます。だからといって、ただちに計算機が敵になるわけでもないのですが、「パワードスーツ」としての情報学と ICT 技術を、今まで以上にわれわれは取り入れていかなければなりませんし、そういった知識を継続的にアップデートしていかなければいけないようです。

話を古典学に戻しますと、ICT 技術の活用の一例としまして、私が一ユーザーとして使わせていただいているツールとして、京都大学大学院文学研究科の林晋先生が中心になって開発している、手書き史料を協働翻刻する SMART-GS と呼ばれるソフトがございます。いろいろメリットがあるのですが、ご説明の時間がなくなってしまいましたので、スライドでイメージ画像だけご覧いただきたいと思います。

2012 年に米長邦雄永世棋聖がコンピュータに負けたとき、羽生名人（当時）は「これか

らはコンピュータの計算処理能力から導かれる一手を人間の知性で理解し、同じような結論を導き出せるかを問われるような気がしてならない」と語ったそうです。文献学も先達の超人的な努力や鋭い洞察や閃きなどにより、新しい知見を積み重ねてきました。しかし、その方法論としてのアナログ的な暗黙知は、誰でも分かるような、そして計算機に入力可能なアルゴリズムとして明示していくべきなのだと思います。そうすると、その問題は人間の手を離れて、計算機がいろいろ処理してくれることになるのだと思いますが、先ほどの羽生氏の談話を重ね合わせれば、今度は計算機が出した答えを批判的に評価し、人間に分かるようにかみ砕くところにも、名人芸は必要となり、もしかするとその点に研究者の生き残る道があるのかもしれないと考えております。

最後に、このスライドは私の研究の成果の一つですが、「そんな簡単に計算機に負けないぞ」という例のつもりです。7世紀頃のこの作品の一節について、全ての写本と全ての注釈は、この赤い線を支持します。ちなみにこの赤い線はこの母音の音調が長いことを示していますが、それはともかく、つまり、いかに現存資料を正確に読んでもこの赤い線しか出てこないのですが、そして、このままでもそれなりに筋の通った議論として読めるのですが、当時の知識を総動員すれば、この線はなかったというシナリオが想定できます。この訂正により、この箇所の話者やシンタックスが大きく変わり、議論全体が大きく変わりますので、非常に大胆な仮説になります。そして、その訂正を正当化するために、関連するギリシャ語の用例など、多くの議論を費やしましたが、最終的にハンブルク大学の先生がたも同意してくださいましたので、この訂正と正当化の方法は妥当だったと考えています。ただし、このような方法論を計算機に渡せるような形で明示するのは想像もできないほど至難の技ですので、計算機がいつ頃この訂正を自律的にできるようになるかは予想がつきませんが、とにかくそう簡単には計算機に負けたくないようにしたいと考えています。そのためには、孤独に文献に向きあい、あるいは少人数で古典のテキストを囲んで、じっくりと一文や一語あるいは一音節にまでとことんこだわるような時間と環境を大切に確保したいと考えています。

では時間を超過してしまったようですので、私からの話題提供は以上とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

(口頭講演を書き起こし・再編集しました)

編集責任: 森本行人(筑波大学人文社会国際比較研究機構)